

古典日本語における対象を表すはだか格とヲ格 ——宇津保物語を資料として——

鈴木 泰

【I】 これまでの研究と課題

古典語における運動の対象を表す名詞の形式としては、はだか格とヲ格が存在する。ただし、はだか格は運動の主体を表すときに用いられる形でもある。ヲ格は、古典語においても間投助辞からの分化が完全ではなく、そうふるくない時代に間投助辞から変化したものであることは、松尾拾ほかの国語学史の研究からも想像にかたくない。

対象を表す際の、はだか格とヲ格の競合がどのような形で存在するかについての調査・研究には、高山道代の研究があり、それでははだか格一般に注目し、運動の主体を表すはだか格がどのような場合に用いられるかにまで調査の範囲はひろげられている。

これに対して、以下の平井吾門の研究は、対象を表す場合に限定されている。

「宇津保物語におけるヲ格の名詞と動詞の組み合わせ—連語論の視点を通したハダカ格との比較分析—」(2008年東京大学提出修士論文)

平井吾門は、高山が源氏物語を資料としているのに対して、宇津保物語を資料として、「名詞がゼロ格で現れる場合、活動性の低い名詞は、動作主体ではなく動作の対象と見られる可能性が大きいのに対して、活動性の高い名詞は、動作主体ではなく動作の対象であることを明示する必要が生じ、ヲ格が用いられる可能性が高い」としている。「父おとどを見つけて」(国譲・中 716)で、ヲがないと、「父おとど」が主語であるか、対象語であるかわからなくなることからも、これは納得しうる。そして、「名詞の種類の問題として考えれば、まず物名詞が現れるときにはゼロ格を伴うことが多く、人名詞や事名詞の場合はヲ格を伴うことが多いということである」と結論づけている。もちろん、こうした指摘はすでに高山道代の研究にあり、最新の高山道代 2014 (178p)でも「平安期日本語における対象語標示の形態には語彙的意味との濃厚な相関性がみとめられ、ヲ格には語彙的意味における有標対象語の標示機能が広くみとめられる」とされている。

以下の鈴木氏の調査では、平井のデータに基づいて、はだか格とヲ格の出現に、対象となる名詞の種類や連語論的要因によるものの他にどのような要因がかかわっているかを検

討したい。名詞の語彙的意味以外の要因には、高山のいうように「ヲ格対象語の場合には述語動詞との間に他の主節成分の介在を許容し、結果的に文中において述語動詞から離れた位置におかれる傾向がある」(高山 2014, 178p) という事実があることはたしかであるが、この点については本稿ではふみこまないことにする。

連語論は統語論として、単語と単語の組み合わせをあつかう分野であるが、統語論的問題としては、文の陳述性にかかわる側面も当然あるはずである。鈴木はすでに口頭発表表(「古代日本語のヲ格とはだか格について」類型学研究会 2010, 2, 7 京都大学付属図書館)で、文の陳述性を、他の文や文の部分との関係性の問題、すなわち機能の問題と、その文ののべかたの問題にわけて、それらがはだか格とヲ格の出現の状況とどのようにかわるかを検討した。しかし、口頭発表においては、対象となる名詞の性質及び連語論的条件と陳述的性格との複雑なかさなりあいをとらえきれていない。そこで本稿では、はだか格とヲ格の出現にそれらのどの条件がつよくはたらいているかを、口頭発表と同様に平井の宇津保物語のデータに基いて調査をすすめていきたい。ただ、平井は名詞の種類と連語論的条件を明らかにすることを目的としていたため、データの用例のとりだしが対象と動詞に限られていて、機能やのべ方が確定できる範囲までとりだされていないことがわかったので、あらたに用例の再確認を行った。そのため、同じ機能やのべかたを問題にした場合でも、データの数値について口頭発表とかなりちがった結果がでることになった。また、平井のデータの見直しは、すこしではあるが連語のタイプの認定にもおよんでいる。また、慣用句として連語から区別した用例についても平井はデータにふくめてあついていたが、今回は除外した。その結果、種々のデータにおいて数値がちがってきたので、本題にはいる前に前提となるデータについて再提示しておきたい。

1、文体的ちがい(表1参照)

文体に関して平井は、和歌、会話文、地の文、絵解き、題の5種にわけ、「和歌や和歌の題ではヲ格が現れやすく、絵解きではゼロ格が現れやすいという顕著な傾向がある。また、会話文は地の文に比べてヲ格の出現率が高い」と指摘している。文体的ちがいがはだか格とヲ格のどちらがあらわれるかとつよい相関性があることが知られるが、まずは対象の語彙的意味の種類及び名詞と動詞の関係性について考えたいので、当面は文体ごとに分析する手法はとらない。

(表 1)

文体	はだか格	ヲ格
歌	78	345
会話文	925	1496
絵解き	319	25
題	1	11
地の文	1712	1171
総計	3035	3048

ヲ格がはだか格の 1 割にもみたくないという絵解きほどではないにしても、それについて
 ではだか格のおおい地の文は、絵解きが手品師の口上などと同様に眼前描写的な文である
 とすると、絵解きのような眼前描写的な文をもとにしてうまれたものであることを想像
 させる。なお、表の数値は用例（平井は「フレーズ」とよぶ）の実数である。

2、対象となる名詞の種類のちがい（表 2 参照）

(表 2)

対象の性質	はだか格	ヲ格
もの	1926	999
こと	293	660
ひと	816	1389
総計	3035	3048

はだか格では、モノ名詞 > ヒト名詞 > コト名詞

ヲ格では、ヒト名詞 > モノ名詞 > コト名詞

となっており、はだか格とヲ格ではモノ名詞とヒト名詞の順位が逆転しており、しかも
 ヲ格ではコト名詞の量がおおはばにふえているが、この結果は、モノ名詞だともつばら
 はだか格をとり、ヒト名詞やコト名詞だと逆にもつばらヲ格をとるということではない
 ことを表している。したがって、モノ名詞だとどうの場合にヲ格をとり、ヒト名詞や
 コト名詞だとどうの場合にはだか格をとるかは別の理由を考えなければならないとい
 うことになる。そこに考えられる理由としては、まずは文の構造的タイプ、つまり対象
 となる名詞と動詞との関係性の問題がある。

3、連語のタイプのちがい

ここでは、はだか格が出現するかヲ格が出現するかが、文の構造的タイプとどのように関係しているかを問題とする。連語に注目することによって、日本語の文の構造的タイプをはじめて詳細にしかも体系的に明らかにしたのは、奥田靖雄の連語論であることは論をまたず、平井においても、構造的タイプの議論は連語論に基いている。平井においても、本稿でも、連語のタイプを次のように階層化してとらえる。

はたらきかけの種類（1，2 など）

連語の種類（1-1，1-2 など）

むすびつきの種類（1-1-1，1-1-2 など）

1 対象へのはたらきかけ

1-1 物にたいするはたらきかけ

1-1-1 もようがえ 御簾を上げて 国譲・上 647

1-1-2 とりつけ 物の葉を葉椀にさして 俊蔭 48

1-1-3 とりはずし 太刀を抜きて あて宮 369

1-1-4 うつしかえ 琴を取り出で 蔵開・上 475

1-1-5 ふれあい 筆を取り給ひて 蔵開・上 490

1-1-6 結果的なむすびつき 家を造り あて宮 368

1-2 人にたいするはたらきかけ

1-2-1 生理的な状態変化 わがぬしを酔はし奉るも 俊蔭 59

1-2-2 空間的な位置変化 尚侍のおとどを渡し奉りて 楼の上・上 856

1-2-3 心理的な状態変化 親を嘆かす 国譲・下 765

1-2-4 社会的な状態変化 尚侍をも引き放ちて 楼の上・下 887

1-2-5 よびかけ 兵衛の君を呼びて 藤原の君 99

1-2-6 生き物の所有 御子を、あまた、平らかに持給へる肖物は 蔵開・上 472

（奥田の連語論にはないがくわえた）

1-3 事にたいするはたらきかけ

1-3-1 変化のむすびつき 心を静めて 楼の上・下 933

1-3-2 出現のむすびつき 若菜摘みたる形を作ったり 蔵開・中 546

2 所有のむすびつき

- 2-1 やりもらい 三巻ありしを、一巻を朱雀院に奉らむ 楼の上・下 941
 - 2-2 ものもち 宝を持ちて 俊蔭 34
 - 3 心理的なかわり
 - 3-1 認識のむすびつき
 - 3-1-1 感性的なむすびつき この皇女を、久しく見ぬかな 蔵開・上 472
 - 3-1-2 知的なむすびつき 忠こその上を思す 忠こそ 111
 - 3-1-3 発見のむすびつき 国譲・中 716 父おとどを見つけて
 - 3-2 通達のむすびつき 思ひつることを言はむ 蔵開・下 576
 - 3-3 態度のむすびつき
 - 3-3-1 感情的な態度のむすびつき 舞をぞ好み侍る 楼の上・下 910
 - 3-3-2 知的な態度のむすびつき 我を、「頑なる田舎人」と思ひて 蔵開・下 575
 - 3-3-3 表現的な態度のむすびつき 物の音を聞き愛でて 俊蔭 41
 - 3-3-4 動作的な態度のむすびつき 宮の内を求め巡り給ふ 内侍のかみ 409
 - 3-3-5 要求的なむすびつき 内外をこそ許し給はめ 蔵開・上 479 (奥田の連語論では「意志的なむすびつき」とともに「モーダルな態度」にいれる)
 - 3-4 内容規定のむすびつき
 - 3-4-1 体験の内容規定 悲しき目を見侍る 俊蔭 47
 - 3-4-2 思考の内容規定 (用例なし)
 - 3-4-3 通達の内容規定 あやしきことを申しけるを 国譲・下 791
 - 3-4-4 動作の内容規定 面白き手を弾く 春日詣 154
- (用例は、ヲ格の例のみをだす。出典は、室城秀之 2001『うつほ物語全改訂版』(おうふう)。巻名とページ数を記す)

なお、奥田は対象的なむすびつきにたいして、状況的なむすびつきをたてるが、状況的なむすびつきは、はだか格の「年経れど」(内侍のかみ 425) のような場合、「年」が対象であるか、主体であるか判別不能であり、ヲ格との比較がむずかしいので、検討の対象から除外し、ここでは対象的なむすびつきのみをあつかう。

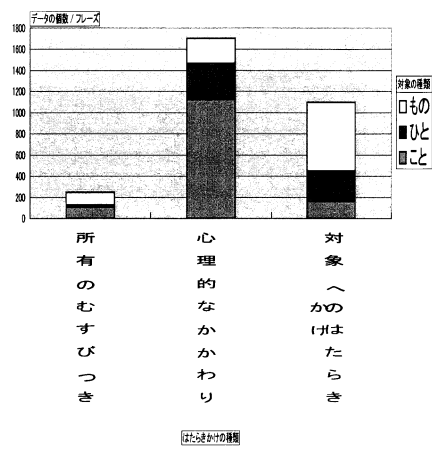
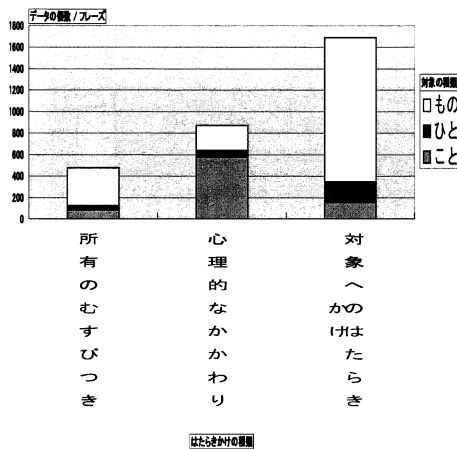
本稿ではまず、対象の種類とはたらきかけの種類のちがいが、はだか格があらわれるか、ヲ格があらわれるかにどのように関係しているかを問題にする。

① はたらきかけの種類と対象の種類からみたちがい (グラフ 1 参照。見えにくい、縦軸の目盛は、200 ずつで 1800 までふられている)

(グラフ1)

はだか格

ヲ格



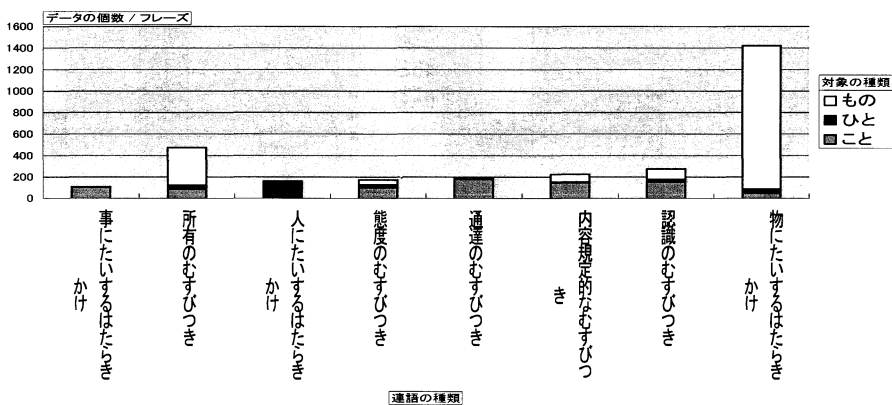
はだか格とヲ格をくらべると、はだか格は、〈所有のむすびつき〉と〈対象へのはたらきかけ〉においては、ヲ格より優勢である。一方、ヲ格は、〈心理的なかわり〉においてははだか格より優勢である。

本グラフより、〈対象へのはたらきかけ〉と〈所有のむすびつき〉がはだか格をとりやすく、〈心理的なかわり〉がヲ格をとりやすいことが知られる。そして、〈対象へのはたらきかけ〉と〈所有のむすびつき〉がよりおおくはだか格をとるのは、対象がモノ名詞であることがおおいことに規定されていると考えられる。一方、〈心理的なかわり〉がよりおおくヲ格をとるのは、対象がコト名詞かヒト名詞であることに規定されていると考えられる。しかし、〈対象へのはたらきかけ〉だけを比較しても、コト名詞やヒト名詞を対象とする場合があり、それらの名詞はヲ格をとるのが普通であるにもかかわらず、この場合にははだか格をとっているわけである。また、〈心理的なかわり〉をみても、モノ名詞があり、それがはだか格をとる場合もヲ格をとる場合もある。そのようにわかれるについては、なにか条件はないだろうかと考えてみる必要がある。その際、〈対象へのはたらきかけ〉はその中に、〈物にたいするはたらきかけ〉の連語だけでなく、〈人にたいするはたらきかけ〉や〈事にたいするはたらきかけ〉の連語をふくんでいることを注意するなら、連語の種類の層にまで下降して、それらの連語がそれぞれどちらの格をとっているかを考えてみる必要がある。

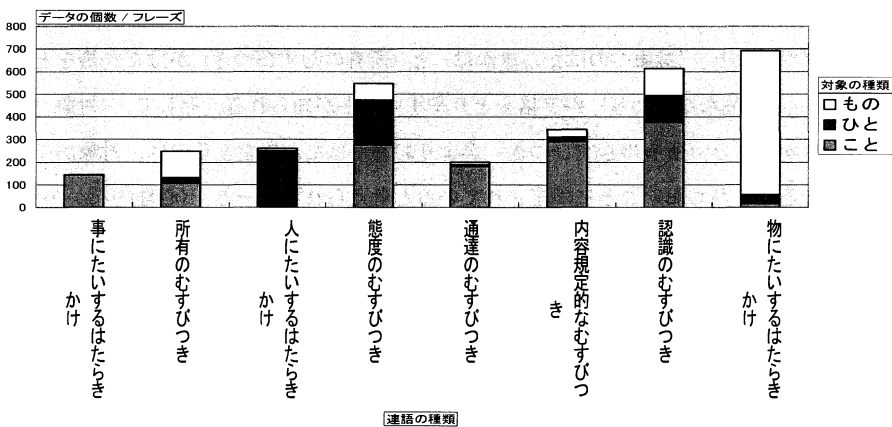
② 連語の種類と対象の種類からみたちがい（グラフ2参照。はだか格の目盛は1600
までで、ヲ格の目盛は800までである）

（グラフ2）

はだか格



ヲ格



《はだか格をとる場合》 〈物にたいするはたらきかけ〉と〈所有のむすびつき〉の連語がはだか格をおおくするのは、対象とする名詞の大部分がモノ名詞であるからだと考えられる。その他の連語は、対象はほとんどヒト名詞、またはコト名詞だけであるので、はだか格が少数しかないと考えられる。

はだか格の出現は、モノ名詞が対象であるとき、上述のように普通にみられるとして

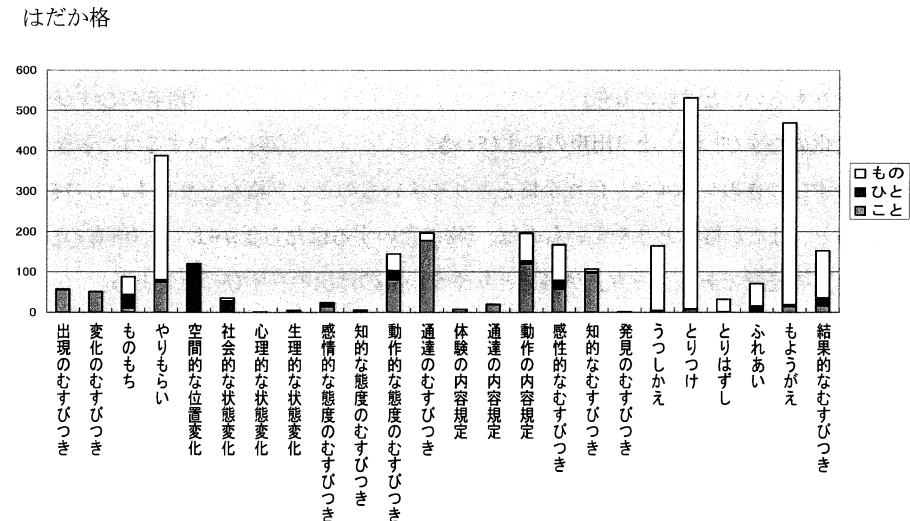
も、ヒト名詞やコト名詞が対象であるときにはだか格が出現するのはやはり異例である。それらが具体的にどういう連語の種類にみられるかは注意する必要がある。特に、ヒト名詞のはだか格での出現は〈人にたいするはたらきかけ〉の連語において顕著であるので、〈人にたいするはたらきかけ〉のなかのヒト名詞のどういうむすびつきがはだか格をとるかはさらに検討が必要である。

また、コト名詞のはだか格での出現は、程度差はあるが、〈心理的なかわり〉のすべての連語においてみられる。また、〈事にたいするはたらきかけ〉においても、〈所有のむすびつき〉においてもみられる。これらは、おそらく対象を特に主体から特立しなかった時代の名残ではないかと考えられるが、具体的にどのようなむすびつきにそれが残っているかということもさらに検討が必要である。

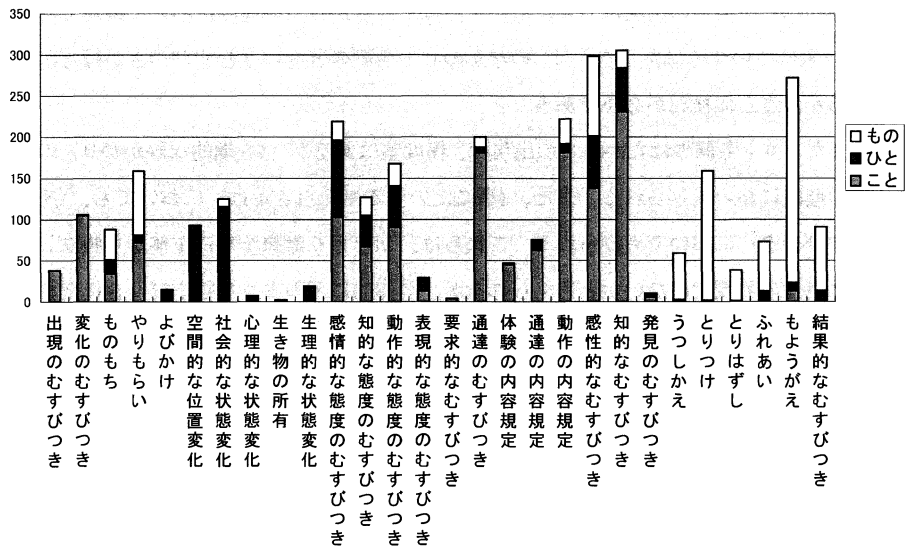
《ヲ格をとる場合》 〈物にたいするはたらきかけ〉と〈所有のむすびつき〉の連語が対象とする名詞のおおくがモノ名詞であるにもかかわらず、ヲ格をとっている。これは、すでに当時大分すんでいた、はたらきかけの対象をヲ格の形でとりたてる習慣がかなり普通になっていたことにしがつたものではないかと思われる。逆の現象は認識や態度のむすびつきなどの〈心理的なかわり〉でモノ名詞がヲ格をとることにみられる。

② むすびつきの種類からみたちがい（グラフ 3 参照。1 目盛は、はだか格は、100 ごとで、600 まで、ヲ格は、50 ごとで、350 まで）

（グラフ 3）



ヲ格-



両グラフは、グラフ2の連語の種類のわくぐみの順にならんでいる。両グラフの順を右側から解説すれば以下のようである。

〈結果的なむすびつき〉から〈うつしかえ〉まで 〈物にたいする働きかけ〉

〈発見のむすびつき〉から〈感情的態度のむすびつき〉まで 〈心理的なかわり〉

〈生理的な状態変化〉から〈空間的な位置変化〉 or 〈よびかけ〉まで 〈人にたいするはたらきかけ〉

〈やりもらい〉と〈ものもち〉 〈所有のむすびつき〉

〈変化のむすびつき〉と〈出現のむすびつき〉 〈事にたいするはたらきかけ〉

むすびつきのレベルで、はだか格をとりやすいものと、ヲ格をとりやすいものを比較すると、はだか格をとりやすいものは、〈物にたいするはたらきかけ〉と〈所有のむすびつき〉の連語である。一方、ヲ格をとりやすいものは次のむすびつきである。

知的なむすびつき、感性的なむすびつき、通達の内容規定、体験の内容規定

知的な態度のむすびつき、感情的態度のむすびつき、社会的な状態変化、

変化のむすびつき、

である。これらのむすびつきに、対象の性質や連語の種類とは別にどのような共通性があるかは、さらに検討が必要であろう。なお、どちらともいえないものは、以下である。

動作の内容規定、通達のむすびつき、動作的な態度のむすびつき、空間的位置変化、出現のむすびつき

【Ⅱ】陳述性からみたちがいい

陳述性を本稿では、《機能》と《用法》と《形式》の3つの観点から記述する（その宇津保物語における具体的な例は論文末の【資料】を参照）。

《機能》は切れるか続くか、続くならどう続くかのちがいである。機能は、〈終止〉、〈接続〉、〈連体〉、〈連用〉、の4つにわけられる。この区別のわくぐみはその下位分類もふくめて、以下の文献によっている。（あとの表3参照）

まつもとひろたけ「動詞非終止形の体系づけ」（2014 別府大学大学院紀要 16）

《用法》については、その内容は機能によって異なっており、それぞれの機能もっている特徴のちがいによってわかる。（あとの表4参照）

〈終止〉は、意志、希望、疑問、禁止、叙述、説明、反語、命令、詠えの《用法》にわかる。このちがいはモダリティーのちがいである。叙述が表出性に関して無標的であり、その他は有標的である。それぞれの《用法》において、意志なら一人称の△形式によって、命令なら命令形によってしるしづけられるように、どのような形態によってその《用法》がしるしづけられるかを《形式》のちがいとする。（あとの表7参照）

〈接続〉は、あとにつなげるという点では条件にちがいが、条件がまつもとによるなら、テンスの対立がなく、「ムードによっていろぞめされた」かたちからなるのにたいして、接続はテンスだけでなくムードによる対立をもつ。〈接続〉は、逆接、後接（後置接続）、準接（準接続）の用法にわかる。後接はホドニ、トキニの場合のように、形式的な名詞を修飾する成分である句や節が後置されるホドやトキと一緒に接続詞と同じ成分になるものである。まつもとの論文にはないが、高橋太郎 2005 でつきそい接続詞とされているものと考え、ここにいった。準接はニやヲなどの助辞に膠着されるので、なりたちの上からは、準体から発するのであるが、その助辞をふくんだかたちが動詞の条件形と同じはたらきをするものである。やはり、テンスだけでなくムードによる対立をもつ。

〈連体〉は、修飾と準体にわかる。これはむしろ機能の延長線上にある区別である。修飾は後続名詞の属性を表すものであるが、準体はその属性そのものが体言に従属せず、独立するものである。準体の場合はそれが主語や補語になる場合がおおく、係助辞や格

助辞が膠着することがおおいが、独立した文になることもある。後者はいわゆる連体終止法ということになる。

〈連用〉は限定、条件、譲歩、中止、副動にわかれる。限定は少数であるが、「この文をだに見せずなりぬること」(蔵開・下 591) のような動詞「なる」を修飾する形の処理のためにもうけた。条件は、いわゆる已然形にバのついた確定と未然形にバのついた仮定の《形式》にわかれる。譲歩は基本的に仮定的意味の、テモ、トモなどの《形式》によるものを一括する。中止は、さらに《形式》において第一と第二にわかれる。なお、まつもとはスルマデをシテカラとの平行関係に基いて、中止形とするが、古典語ではシテカラのような中止形から肥大化したかたちがないので、スルマデは接続の機能ではたらくものとする。なお、副動(副動詞形)は、《形式》において、トテを膠着させる動機と、ニを膠着させる目的とにわかれるが、ナガラやツツもある。

① 機能からみたちがいい(表3参照)

(表3)

機能	はだか格	ヲ格
終止	993	1086
接続	183	163
連体	370	362
連用	1489	1437
総計	3035	3048

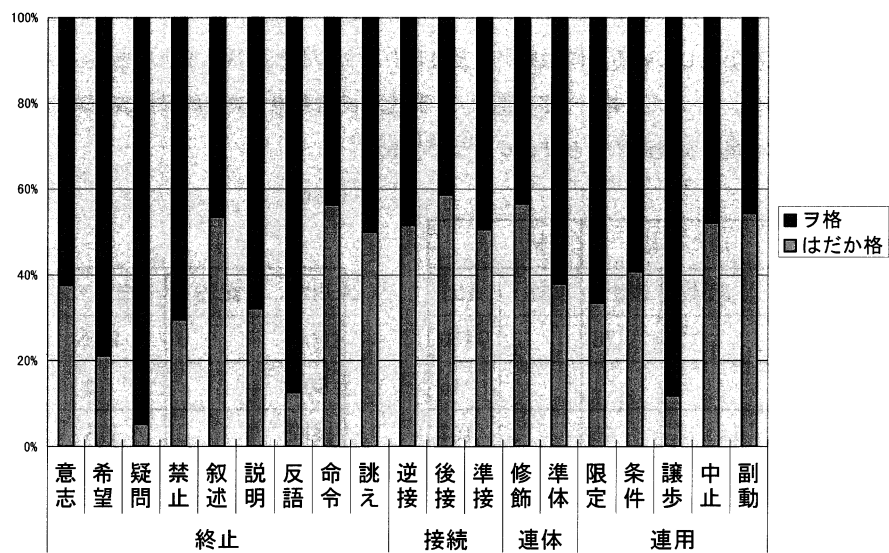
(表3)によるなら、はだか格とヲ格で、機能ごとの割合はかわらず、全体としては切れ続きの機能は、はだか格をとるか、ヲ格をとるかには直接大きな影響をあたえていない。高山 2014 も、「対象語と文法的関係性のある動詞の語形態(終止形／連体形・已然形)と名詞の語形態(ハダカ格／ヲ格)の現れに積極的な相関性は確認できない」(176p)としている。

② 用法からみたちがいい(表4、グラフ4、表5、表6参照。表で、あみかけは有意的におおいところである。グラフはそれぞれの用法全体を 100%としたときのはだか格とヲ格の割合)

(表 4)

機能	用法	はだか格	ヲ格
終止	意志	80	133
	希望	4	15
	疑問	6	109
	禁止	5	12
	叙述	802	700
	説明	8	17
	反語	5	35
接続	命令	81	63
	詠え	2	2
	逆接	34	32
	後接	54	38
	準接	95	93
連体	修飾	281	216
	準体	89	146
連用	限定	4	8
	条件	115	167
	譲歩	2	15
	中止	1230	1131
	副動	138	116

(グラフ 4)



終止においては、叙述と命令で、はだか格 > ヲ格。

その他の曲調終止で、
接続においては、
連体においては、修飾で、はだか格 > ヲ格。
連用においては、限定、条件、譲歩で、

ヲ格 > はだか格。
はだか格 > ヲ格。
準体で、ヲ格 > はだか格。
ヲ格 > はだか格。

これらから、終止においては、はだか格、ヲ格ともに、他の叙法にくらべて、圧倒的に叙述がおおいが、はだか格では疑問がほとんどあらわれないとともに、希求やはたらしかけ性をもった叙法（これを曲調終止といった）もあらわれない。これは、はだか格が「女の装ひ被く」（あて宮 363）のような最も素朴で無標的な直叙形式に用いられことがおおいということを示す。直叙ではないにもかかわらず、命令形だけにおおくはだか格が用いられているのは、命令文のシンタグマとしての結束性の固さに関連するのではないかと思われる。また、連用において、中止と副動詞がかなりたかい割合ではだか格に用いられている一方で、譲歩がほとんどはだかの形では用いられないことは、のべ方として複雑で余情のともなう意味あいがつよいためであろう。

ここで、こうしたちがいが、文体的なちがいと関係するところはないかを考えてみたい。さきの 1 〈文体的ちがい〉の調査によれば、はだか格は絵解きと地の文におおくあらわれる。一方、ヲ格は和歌とその題、および会話文におおくあらわれる。カール・ビューラーのいう言語機能の面からいえば、絵解きと地の文は記述的機能のまざった言語表現として一括することができ、和歌と会話文は表出的機能のまざった言語表現であると一括することができよう。はだか格、ヲ格と共起する機能や用法がそれぞれどちらの言語表現に出現しているかに注目すると表 5 のようにまとめることができる。また、(表 5) を基にして、はだか格、ヲ格の別なく、記述的言語表現と表出的言語表現にわけて、それぞれの用法を集計すると表 6 のようになる。

(表 5)

	はだか格		ヲ格	
用法	記述	表出	記述	表出
意志	2	78	3	130
希望		4		15
疑問		6	2	107
禁止		5		12
叙述	666	136	249	451
説明	2	6		17

(表 6)

用法	記述	表出
意志	5	208
希望		19
疑問	2	113
禁止		17
叙述	915	587
説明	2	23

反語		5		35	反語		40
命令		81		63	命令		144
詠え		2		2	詠え		4
逆接	16	18	14	18	逆接	30	36
後接	19	35	9	29	後接	28	64
準接	43	52	35	58	準接	78	110
修飾	97	184	49	167	修飾	146	351
準体	35	54	21	125	準体	56	179
限定	1	3		8	限定	1	11
条件	49	66	72	95	条件	121	161
譲歩		2	2	13	譲歩	2	15
中止	1011	219	679	452	中止	1690	671
副動	91	47	64	52	副動	155	99
総計	2032	1003	1199	1849	総計	3231	2852

（表6）から、はだか格とヲ格のどちらが用いられるにかかわらず、終止では、意志、希望、疑問、禁止、説明、反語、命令、詠えなどの曲調的な用法はもっぱら表出的言語表現であられることがわかる。曲調的な終止は発話者の態度の表出であるという性格がつよいので、表出的言語表現においてよくあらわれるのは当然だが、格形式についても表出的な文体ではヲ格が選ばれるので、見かけ上は、曲調的終止の出現とヲ格の出現に相関関係があるようにみえる。が、このように考えるなら、曲調的終止の出現とヲ格の出現の相関は、それが出現する文体的特徴を媒介にしているといえることができる。ただし、命令だけは、曲調終止でありながら、格としてははだか格が優勢である。これは、命令形の一語文的な原初性の残存などもその要因として考える必要があろう。

接続に関しては、どの用法においても、僅差ではだか格が優勢であるが、つかわれている文体についてみると、いずれの場合も表出的言語表現が優勢である。つまり、この場合は機能の出現と格選択はそれらがあらわれる文体に媒介されているとはいいたい。

連用では、譲歩と条件は表出的言語表現で優勢であり、それに平行してヲ格の出現率もたかい。この2つの用法の出現とヲ格の出現率のたかさは、それらのあらわれる文体によって媒介されているといえる。一方、中止と副動は6割以上の割合で記述的言語表現で出現するが、その割にはおおくヲ格が出現している。つまり、この場合の用法の出

現と格形式の選択も文体によって媒介されていると断言してしまうことはできない。

連体では、どの用法も7割がた表出的言語表現にあらわれるが、記述的言語表現にも3割強はあらわれる。準体の場合は文体に媒介されているようで、用法の出現と格選択が相関しているが、修飾の場合は文体的には表出的言語表現にあらわれる方がおおいのに、はだか格の方がおおい。この場合も文体に媒介されて、用法と格選択が相関しているとはいえない。属性を表すという機能のために、主名詞と対立させて対象をとりたてることがはばかれるのであろう。

③ 形式からみたちがい (表7参照)

(表7) はだか格

用法	形式	集計
意志	じ	2
	む	78
希望	しがな	2
	ばや	2
疑問	か	1
	や	1
	疑問詞	4
禁止	な	5
叙述	かな	5
	かも	1
	こそ	10
	ぞ	4
	つつ	3
	とか	1
	なむ	14
	なり	1
	ものか(な)	3
	ものぞ(や)	2
	ものなり	3

ヲ格

用法	形式	集計
意志	こそ	4
	じ	5
	む	124
希望	しがな	1
	なむ	2
	ばや	6
	まし	4
	まほし	1
	もがな	1
疑問	か	10
	や	20
	疑問詞	79
禁止	そ	7
	な・そ	5
叙述	かな	42
	こそ	68
	ぞ	41
	で	1
	ななり	1

	ものに	1
	ものを	1
	や	6
	やは	1
	直叙	746
説明	なり	5
	にあり*1	3
反語	かは	2
	や	2
	やは	1
命令	命令形	81
詠え	なむ	1
	や	1
逆接	ど	28
	ども	6
後接	かぎり	1
	ころ	1
	とき	14
	のち	3
	ばかり	7
	ほど (に)	27
	即ち	1
準接	が	3
	からに	1
	ついで	1
	に	49
	の	1
	まで	4
	より	4
	を	32

	なむ	46
	なり	11
	ものかな	1
	ものを	7
	よ	1
	直叙	481
説明	なり	2
	にあり*1	15
反語	かは	8
	ものか	1
	や	7
	やは	9
	疑問詞	10
命令	命令形	63
詠え	や	2
逆接	ど	24
	となけれども	1
	ども	7
後接	あいだに	1
	ころ	1
	ついでに	1
	とき (に)	13
	のみ	1
	ばかり	1
	ばかり (に)	4
	ほど (に)	11
	ま (間)	1
	まま	1
	ものから	1
	即ち	1

修飾	日	2
	かぎり	1
	かた	1
	こと	30
	ころ	1
	さま	3
	とき	1
	なか	4
	ばかり	1
	やう	9
	よし	1
	者	1
	所	6
	盛り	2
	如	1
	名詞	217
準体	こそ	11
	ゼロ*2	46
	など	1
	なむ	1
	の	1
	は	19
	はや	1
	も	3
	を	6
限定	す	1
	なる	3
条件	ては	7
	なれば	1

	毎に	1
準接	が如し	2
	に	77
	より	4
	を	10
修飾	日	1
	かた	1
	け (気)	1
	こと	34
	とき (に)	1
	もの	5
	やう	29
	所	1
	如	3
	名詞	140
準体	か	1
	が	11
	こそ	18
	しも	1
	ゼロ	53
	ぞ	3
	ぞや	1
	ななり	1
	なむ	11
	に	2
	は	20
	はや	2
	も	7
	や	1

	は	4
	ものならば	1
	仮定	11
	確定	91
譲歩	とも	2
中止	第一	208
	第二	1022
副動	がてら	1
	つけて	3
	つつ	48
	で	10
	と	1
	ながら	4
	まま	1
	動機	43
	毎	1
	目的	26

	よ	2
	を	12
限定	なる	8
条件	(もの) ならば	3
	せば	1
	たらば	1
	ては	3
	てば	1
	では	1
	なれば	2
	は	2
	ましかば	5
	仮定	25
	確定	123
譲歩	ても	6
	とも	9
中止	にて	1
	第一	249
	第二	881
副動	つつ	58
	で	39
	ながら	4
	重複	2
	動機	8
	目的	5

(注)

- * 1 「にあり」は、ニアラズ、ニアリケリ、ニコソ (アレ)、ニアナリ、ニアラム、ニアリケム、ニアメリをふくむ。
 - * 2 ゼロは何も助辞がつかないものである。
- 表には、ある 1 つの《形式》に関してはだか格の例数とヲ格の例数をくらべ、その差が有意的と思われる場合に、おおい方にあみをかけた (表 8、表 9 でも同様である)。

はだか格の方がおおい形式は以下である。

叙述 直叙、 命令 命令形、 後接 ほど(に)、 準接 を、 修飾 名詞、
条件 ては、 副動 動機、 副動 目的

ヲ格の方がおおい形式は以下である。

意志 む、 疑問 か、 疑問 疑問詞、 叙述 かな、 叙述 こそ、 叙述 ぞ、
叙述 なむ、 説明 にあり、 準接 に、 修飾 やう、 準体 なむ、 準体 を
(格助辞)、 限定 なる、 条件 仮定、 譲歩 とも、 副動 で

終止では、はだか格に直叙がおおく、ヲ格に曲調的な叙法がおおいことが知られる。
また、ヲ格には、コソ、ゾ、ナムによる係り結びをもつ強調的な叙法がおおい。連体において、名詞の属性を表すだけの用法ははだか格におおい。連用においては、中止がむしろヲ格におおいのたいてして、動機や目的の副動詞ははだか格におおい。条件では、仮定的、譲歩的な関係を表すものは、ヲ格におおい。

なお、高山 2014 は「準体句形対象語の標示形態として、ハダカ格は若干の用例がみとめられるのみであり、大半がヲ格で現れる」(169p)としている。本稿の調査で準体句が対象語となり、それをヲ助辞で標示している例数には、いわゆる連体終止法をふくんでいるので、それをのぞくと、ヲ格：はだか格＝14：8ということになる。この結果からは、宇津保物語でもおおよそ高山によって指摘されたのと同じ傾向がみとめられる。

【Ⅲ】動詞の形態からみたちがいい

本稿では、機能・用法・形式のほか、動詞の叙述性にかかわる検討項目として、相極とムードという項目をもうけ、それについても調査している。南不二男の四段階論にしたがえば、動詞の叙述性には、内容の形象化を主たる役割とする描叙段階と、それをあつかう話し手の態度を表す判断段階との2つを区別することができる。前者が〈相極〉で、後者が〈ムード〉であり、両者ともに、動詞に付加される接辞によって表される。〈相極〉とはアスペクトと極性(みとめ方)、〈ムード〉とはテンス・ムードを表すものである。これらは文の陳述性に直接にかかわるものではなく、それに支配される文の叙述性にかかわるものである。

なお、表で、アリ、オハス、候フ、侍りなどは、『はかなき人に物言ひ触れて侍り』国譲・下747の、シテ侍りのようなかたちで用いられるもので、タリ形の尊敬または謙譲形と考えられるものである。

① 相極を表す接辞の一覧をあげる（表 8）

（表 8）

はだか格		ヲ格	
相極	集計	相極	集計
あり	3	あり	3
おはします	2	おはす	3
おはす	5	ず	142
ず	116	たり	76
たり	274	つ	59
つ	67	てふ	2
と	2	ぬ	16
などす	15	べし	9
ぬ	15	むず	1
べし	6	むとす	2
めり	1	めり	3
ものす	1	り	45
らる	2	る	2
り	144	ゐたり	1
る	9	ゐ給へり	1
ゐたり	4	をり	1
ゐ給へり	1	候ふ	2
候ふ	7	侍り	5
侍り	5	総計	373
総計	679		

タリ、リ、ツで、はだか格が優勢であるように、アスペクトを表す接辞は、はだか格をとる動詞につくことがおおい。また、自発を表すル形態でもはだか格が優勢である。しかし、みとめ方を表すズでは、ヲ格がおおい。

② ムードを表す接辞の一覧をあげる（表 9 参照）

(表9) はだか格

ムード	集計
あり	1
き	77
けむ	2
けり	33
ざめり	1
じ	2
ず	3
たり	2
つ	6
なり(伝聞)	9
べし	58
まし	4
まじ	1
まほし	4
む	126
むとす	6
めり	11
らむ	9
を(間投)	2
侍り	1
り	1
総計	359

ヲ格

ムード	集計
あり	1
き	93
けむ	15
けり	39
じ	10
ず	15
たり	32
つ	16
てふ	1
ぬ	6
べし	35
まし	12
まじ	5
まほし	4
む	180
むず	2
むとす	3
めり	14
らし	2
らむ	16
り	11
なり(伝聞)	9
総計	521

なお、ズ、タリ、リ、ツ、ヌなどは、他の接辞と複合するとき、上位する場合と、下位する場合とがある。この表では、上位する場合は相極の接辞とみなし、下位する場合はムードの接辞とみなした。これらの表からわかるように、否定のズのほかに、ケム、ジ、マシ、マジ、ム、メリ、ラムなど、認識的なムードを表す助辞を膠着させる動詞文ではヲ格が用いられることがおおい。また、キ、ケリといった過去の助辞がつかわれるときも、ヲ格がおおめである。ただ、ベシだけが、はだか格の方が優勢である。これは命令ではだか格が優勢なのとあい呼応するものであろう。まとめると、描叙段階でははだか格が優勢であるが、判断段階ではヲ格が優勢になるということである。厳密な調査はまだだが、この相関は、描叙性は記述的な文体の特徴であり、判断性は表出的な文体の特徴であると考えらるなら、やはり文体的なものに媒介されているといえそうである。

③ 相極の接辞と機能からみたちがいい

表は省略するが、終止で用いられるときと、連体で用いられるときでどちらの格があ

らわれやすいかをしらべると、ツ、ヌ、ベシがつく場合、連体より終止がよくあらわれる。その場合は、はだか格でも、ヲ格でも終止で用いられるものの方がおおい。ズがつく場合は、はだか格では、連体がおおくあらわれるが、ヲ格では終止がおおい。タリ、リがつく場合は、はだか格では、終止が優勢だが、ヲ格では連体が優勢である。

④ ムードの接辞と機能からみたちがいい

表は省略するが、はだか格では、キ、ケリ、ベシをとる場合、終止より連体がよくあらわれる。しかし、ム、メリをとる場合は連体より終止がよくあらわれる。ヲ格では、キ、ケリをとる場合は終止の方がおおくあらわれる。また、認識的なムードのケム、マシ、ジ、ム、ラムをとる場合は、ヲ格では、終止形がよくあらわれる。なお、ズ、タリ、ツ、ヌ、リをとる場合もヲ格では終止の方がよくあらわれる。ムードの接辞としてとりあげるズ、タリ、リ、ツ、ヌはすでに相極の接辞としてとりだされているので、両者を合併して考えると、合併しても相変わらずヲ格においては終止がおおい。しかし、リだけはやや連体の方がおおくなる。以上接辞のついた形態における格選択との関係は、表出的か記述的かの文体的性質のちがいと関連づけて説明できる場合もありそうだが、その観点から十分な調査はしていないので、その結論については今後の検討にまきたい。

⑤ 相極、ムードの接辞とはたらきかけの種類からみたちがいい

表やグラフは紙数の都合でしめさないが、接辞のたぐいが、どのようなはたらきかけの動詞に膠着することがおおいかを検討すると、タリ、リに関してだけは、〈対象へのはたらきかけ〉について〈所有のむすびつき〉にあらわれることがおおいといえる。また、その他の接辞に関しては、はだか格、ヲ格にかかわらず、また相極の接辞であろうが、ムードの接辞であろうが、すべて〈心理的なかわり〉にあらわれる場合が最もおおい。

【IV】 おわりに

古典日本語において、はだか格があらわれるか、ヲ格があらわれるかは、第一次的には、対象の種類と称したもの、すなわち対象がアニメシー（活動性）のある名詞で表されるか、それのない名詞で表されるか、によっておおよそきまっている。それは、さらにははたらきかけの種類がちがいとも相関している。本来アニメシーの面で有標的な名詞を対象とする場合に用いられるヲ格が、アニメシーの希薄な名詞にも用いられるのは、時とともにヲ格のつかわれる範囲が拡大していった結果ではないかと想像される。また、

陳述性の面においては、表出性のつよい場合などにおおくヲ格があらわれるという傾向がある。しかし、これは、はだか格、ヲ格の出現と直接に相関するのではなく、かなりの程度、それらが出現する環境である文体的なちがいを媒介にしているものと考えることができる。また、アスペクトを表す接辞のついた動詞形態でははだか格がおおくあらわれ、テンスやムードを表す接辞のついた動詞形態ではヲ格がおおくあらわれるという傾向もある。これは叙述性の階層構造において、描叙性のつよい段階でははだか格が、判断性のつよい段階ではヲ格が優勢であるということだととらえるなら、当然描叙性のつよい文は記述的な文体と親和性がたかく、判断性のつよい文は表出性のつよい文体と親和性がたかいと考えることのできるから、やはり文体的なものを媒介にして相関しているのだということになりそうだ。

【資料】

終止	意志	「御返り賜はらむ」 楼の上・上 838 便りを与へむ 俊蔭 12
	希望	この御馬ども、同じくは、手番にして比べばや 祭の使 207 かれを聞き見るものにもがな 内侍のかみ 399
	疑問	などで、御返り書き給ふ 国譲・上 645 何ごとをか仰せられむ 内侍のかみ 413
	禁止	悪しき目見せ給ふな 忠こそ 112 それをだに、な忘れ給うそかし 嵯峨の院 174
	叙述	源宰相に、文書き給ふ 沖つ白波 455 わが君をこそ、世の例には聞こえめ 吹上・上 250
	説明	あたら明王がねの、多くの人嘆かせ給ふにぞあめる 蔵開・中 560 山を頼むなりけり 吹上・下 288
	反語	おのれは、密か男し、人と文通はしやはする 国譲・中 698 今宮をやは取らせ給はぬ 内侍のかみ 379
	命令	御文持て参り給へ 藤原の君 73 有様をのたまへ 蔵開・下 576
	詠え	この宮、男子生み給はなむ 国譲・中 699 かかることを聞こえさせてむや 嵯峨の院 163
接続	逆接	御文、度々奉り給へど、御返りなし 国譲・上 624 この九をば、少し心異に思へども 嵯峨の院 175
	後接（後置接続形）	いらへ聞こえ給はむとするほどに覚めて 楼の上・下 907 世の中を知らざりし時は 国譲・上 652
	準接（準接続形）	ここにある人の小さき、物食ひ始めけるを 国譲・中 718 一国を治むるに 02 藤原の君 085⑩
連体	修飾	かくばかりの琴弾くべき人の思ほえぬかな 内侍のかみ 427

		御前を磨き飾れること限りなし 吹上・下 283
準体		栗出だしけむは、仲頼の少将の妹なり 蔵開・中 567
		古りにしものを改むる 楼の上・上 848
連用	限定	世の中に物思ふにこそなりぬべけれ 楼の上・上 848
		この文をだに見せずなりぬること 蔵開・下 591
条件	確定	ただ先つ頃こそ、手本召ししかば、奉れしか 国譲・中 723
		食ひ着し物をも知り給はねば 忠こそ 114
	仮定	琴習はせ給はば、宮には聞かせ奉らでなむ習ひ給ふべき 楼の上・上 861
		それを御覧ぜば、慰ませ給ひてむ 楼の上・上 867
譲歩		粗食賜はすとも、仕うまつりなむ 藤原の君 86
		位を賜ふとも、え伝へ奉らじ 俊蔭 54
中止		(第一) 琴を掻き鳴らし 俊蔭 28
		(第二) いぬ宮抱きて出で来たり 蔵開・中 553
副動	動機	仲忠の宰相に御かはらせ賜はすとのたまはす 沖つ白波 448
		御文を書きて取らすとて 国譲・下 759
	目的	魚釣りに来つるぞ 俊蔭 38
		これを聞かせ給ひにおはしましたり 楼の上・下 928

参考文献

- 言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』 むぎ書房。
- 高橋太郎 2005 『日本語の文法』 ひつじ書房。
- 高山道代 (2014) 『平安期日本語の主体表現と客体表現』 ひつじ書房。
- 平井吾門 (2008) 「中古語における対格表現—宇津保物語のヲ格とゼロ格をめぐって」 日本語文法学会 2008 年度秋季発表 (神戸大学)。
- 松尾 拾 (1938) 「平安初期に於ける格助詞『を』」 『国語と国文学』 15 卷 10 号。
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店
- Bühler, K. (1934) (カール・ビューラー 『言語理論—言語の叙述機能』、脇坂豊他訳、1983、クロノス)。